

## ● 関 西

### 嶋 田 邦 雄

「関西での演奏会はどこも満席に近い。文化全体の土壌も確かに豊かになっている。その点では、盛況と言っていいのだろうが、楽団や演奏家、新しく入ってくる若手や彼らを育てる音楽大学など、音楽関係者の生活環境や運営は逆に苦しさが増している」——演奏者や音楽団体に関係する人たちはみな一様に現在の状況判断に戸惑う。2017年、定期演奏会の公演日数を2日に増やした日本センチュリー交響楽団が18年になって1日公演に戻したこともその表れかも知れない。そのうえ、関西は18年6月18日の大阪府北部地震と、2度の台風直撃でコンサートホールや演奏会も影響を受けた。地震では関西二期会の「カヴァレリア・ルスティカーナ」「道化師」公演（6月23・24日）が会場（吹田・メイシアター）損傷のため、台風では「大阪コレgium・ムジクム」の京都公演（9月30日）などが交通機関の運休で中止に追い込まれた。さらに「2019年に消費税10%へのアップが実施されると、入場料金だけでなく、目に見えない形でのマイナス要因が加速する」と心配する。流れはこのように先行き不透明だが、その中で2018年を特徴づけた意欲的な公演が少なくなかったことも見落とせない。まず、兵庫県立芸術文化センターで7月に上演したオペラ「魔弾の射手」の演出（ミヒャエル・テンメ）。この歌劇の舞台をドイツの30年戦争（1618-48）直後に位置付け、戦争が農民や民衆にいかにかえりやたい傷を与えたかを形象化。また、8月の京都市交響楽団定期演奏会（高岡健・指揮）ではブリテン「戦争レクイエム」を、9月には大阪新音フロイデ合唱団と大阪フィル（大友直人・指揮）がフォーレとデュリュフレの「レクイエム」を演奏、いずれも現在、世界が抱える戦争などの危機に音楽を通じて向き合った。大阪では大阪フィル、関西フィル、大阪交響楽団、日本センチュリー交響楽団の4オーケストラが2019年の演奏スケジュールなどを初めて共同で発表（11月13日）。これまで何回か積み重ねてきた4オーケストラ公演の実績を一步進めた形だ。

各分野別に見よう。オペラでは《びわ湖ホール》が自らのプロダクションでワーグナー「ニーベルングの指輪」シリーズを継続中。「ラインの黄金」と「ワルキューレ」をすでに披露、2019年3月3日には「ジークフリート」を上演。沼尻竜典・指揮ら、お馴染みのスタッフが舞台を構成しているが、オーソドックスな演出（ミヒャエル・ハンペ）が「リング」の魅力を改めて引き出した。ほかに、新国立劇場と提携しての「トスカ」や中ホールでの「魔笛」も注目された。《兵庫県立芸術文化センター》の「魔弾の射手」（上述）や、フェスティバルホールを舞台にした《大阪国際フェスティバル》も独自の催しで支持を広げている。外来アーティストのほか、地元勢も活躍。大阪フィルと声楽陣によるRシュトラウス「サロメ」（尾高忠明・指揮、演奏会形式）を19年6月に上演するなど多彩だ。いずれも、大舞台の機能を生かした演出で観客を惹き付ける一方、兵庫県川西市の《みつなかホール》での「トスカ」は座席数420のホール機能を巧みに使いこなした演出（井原弘樹）や歌唱陣の好演で見事な舞台（牧村邦彦・指揮）に結実した。地域オペラの一つの在り方を示す事例として注目される。関西二期会も

12月にリムスキー＝コルサコフ「サルタン王の物語」を上演（兵庫県立芸術文化ホール中ホール）。大阪音楽大学はザ・カレッジ・オペラハウスを舞台にこれまで内外の多様な作品を上演してきたが、2017年からはオペラ史を跡づけるような演目に集中。18年はメノッティ「テレフォン」と「泥棒とオールドミス」で、現代の市民生活の中に潜む不条理や恐怖をコメディ・オペラに纏め上げた。

オーケストラでは大阪フィルハーモニー交響楽団が新しい音楽監督・尾高忠明とともにベートーヴェン交響曲全曲演奏を実現したし、2019年にはブラームス交響曲チクルスなどを披露する。関西フィルハーモニー管弦楽団は18年7月に公益財団法人に移行。音楽監督・オーギュスタン・デュメイ、首席指揮者・藤岡幸夫、桂冠名誉指揮者・飯守泰次郎を中心とした態勢で厚いファン層の要望に応えるプログラム編成を目指す。大阪交響楽団も18年11月に公益社団法人化。太田弦を新たに正指揮者に迎え、ミュージック・アドヴァイザーの外山雄三、常任指揮者・寺岡清高や多様な客演指揮者による魅力的な演目を用意。2020年2月には、楽団の飛躍にエポックを作ったトーマス・ザンデルリングの来演を予定。日本センチュリー交響楽団は飯森範親を中心に、シンフォニーホールと、ハイドン交響曲中心の「いずみホール」定期演奏会を継続。12月には楽団創設期の音楽監督だったウリエル・セガルが来演する。京都市交響楽団は常任指揮者・広上淳一を中心に熟成したプログラム編成と演奏内容で、また兵庫県立芸術文化センター管弦楽団も芸術監督・佐渡裕のリードと優れた客演指揮者群によって変わらぬ賑わいを誇示している。

小編成の演奏集団も旺盛な活動を続けている。大阪の日本テレマン協会は創立55周年になるのを機に、古楽とモダン演奏の両面で新たな飛躍を目指す。中之島の大阪市中央公会堂中集会室を一つの拠点に、「中の島を日本のウィーンに」の演奏キャンペーンを始めた。大阪コレgium・ムジクムも古楽と現代の音楽でユニークな活躍を続けている。特にモンテヴェルディなどバロック期の作品と、関宮芳生や西村朗ら日本現代の合唱曲の紹介にも力を入れている。神戸市内管弦楽団も装いを新たに。かつての弦中心の室内合奏団が管楽器群を加えた楽団にスケールアップし、多様な演目にチャレンジ。阪神淡路大震災を機に設立されたアンサンブル神戸も古典派の曲目を中心に、現代曲にもレパートリーを広げながら真摯な演奏を積み重ねている。京都府民ホール「アルティ」を舞台に、レヴェルの高い演奏を続ける京都アルティ弦楽四重奏団も結成20周年を迎え、18年11月に記念演奏会を開いた。シューベルトの「弦楽四重奏曲第15番」と「弦楽5重奏曲」を披露し、聴衆の熱い拍手が続いた。特異な演奏集団として知られるシリクス・フルートアンサンブルも独自の演奏活動を。フルーティストの持田洋を中心に、多様なフルート属の楽器でオーケストラを編成。独自の編曲で多様で魅力的な演奏会を構成。オオサカ・シオン・ウインド・オーケストラの演奏活動も見落とせない。創立95年になるかつての公益社団法人・大阪市音楽団が大阪市からの資金援助を絶たれた後、すべて自前で演奏活動を続け、苦境を乗り切る展望が出てきたことに大きな期待が寄せられている。レヴェルの高いウインド・オーケストラを守ろう、と宮川彬良が音楽監督、秋山和慶が芸術顧問に就任。飯森範親からも定期演奏会の指揮に加わり、支持を固めている。